

## 受講生とともに

関 未玲

立教大学全学共通カリキュラムで言語副専攻制度が開設されてから4年が経ちました。この間副専攻修了者を輩出し、基礎科目であるフランス語「中級」、「スタンダード」、コア科目である一連の上級科目、関連科目の「フランス語圏の文化」、「フランス語圏の社会」等の様々な授業が展開され、意欲的な学生のニーズに応えるようなプログラムが益々充実してきていると感じております。その中で私は2012年度より「フランス語中級1/2」を担当させて頂いております。この授業は週に2回開講されていて、ネイティブの教員と日本人教員がペアとなり、全カリフランス語の目標とする「聞く・話す・読む・書く」の4技能がもれなく習得できるように、連携を組んで授業を行っています。

受講生は、1年次の必修で初習言語としてフランス語を学習してきた2年次以降の学生が、主たる対象者となります。専門科目などで忙しくなるこの時期に、履修単位数の上限を超えないようにフランス語の授業を週に2度も選択して受講するというのは、学生にとってはやはり大きなリスクを伴います。そのような覚悟をもって臨んでくる学生ばかりですので、1年次とは違う緊張感が一方で感じられます。さらに学内の留学プログラムに応募すべく仏検合格を目指している学生や、異文化コミュニケーション学部または経営学部国際経営学科内のプログラムですでに留学が決まり即戦力を身につけたいと焦燥感を持って臨む学生も多く、

学期末までに確実に実力が定着する授業運営を行う使命もこちらに課せられます。他方で、自らの教養としてフランス語を楽しく学びたいという受講生や、フランス語は好きだけれど専門科目が忙しいため、予習や復習になかなか時間を取れない学生も少なからずいます。こういった様々なニーズや事情に対してどれだけ間口を広げて対応できるか、緩急のさじ加減に悩みながら試行錯誤で日々授業運営に取り組んでいます。

事実、これまで「フランス語中級」の授業で常に問題となってきたのが、バックグラウンドの異なる受講生間の実力差と、授業に対して求めるニーズにあまりにも開きがあるという点でした。学部によっては1年次の初級フランス語の授業数が全カリの必修以外にもあって、当然フランス語力にも反映し、実力に差が出てしまうことは否めません。しかし語学学習の良い点は、根気良く続ければ、かけた時間や年月の分だけ必ず身になるという点です。フランスという昨今決してメジャーとは言いつれない興味を共有する貴重な仲間と出会い、週に2度も顔を合わせることができるチャンスですから、4月と9月の開講時の実力でクラスの雰囲気が決まってしまうような授業だけは避けるよう、肝に銘じて努めています。全カリ中級クラスの最大の利点も、普段はなかなか出会うことのできない他学部他学科の立教生同士が知り合うことができることだと思っています。フランス語のレベルにそれぞれ個

人差はあったとしても、フランス語という共通の関心を通して互いに支え合い切磋琢磨し、全員がそれぞれに自らの実力を最大限伸ばせることを目標にしています。そのため授業では、クラス内のコミュニケーションをととても重要視しています。

授業はまず、会話練習から始めます。各課の文法事項を手短に説明した後に、比較的容易に内容を理解できるダイアログを選んで発音に注意しながら練習を行い、受講生同士ペアになって何度も練習してもらいます。受講生がクラス内を大きく移動し、できるだけ多くの仲間と接することができるように、その後何度もペアを換えて15分ほど会話練習に時間を割きます。そして授業の最後には必ずこの会話文を暗記して、パスできたペアから帰ってもらうようにしています。学期初めには数行だった暗記文の量が、年度末には10行近くを覚えられるようになるので、一年間語学学習を続けるとこれだけの成果につながるのかと驚くほどです。もちろんこの量になるとただの暗記ではもはやなく、頭のなかで仏作をしながら話すというまさに発話のプロセスが実践されています。自身の学生時代を振り返ってみても彼らのフランス語力は高く、4月にはたどたどしかった発音も年度末を迎える頃には流暢で、仏検合格者も続々と現れ、1年の終わりには毎回感銘を受けてしまうほどです。

会話練習が終わった後は、ペアの相手と一緒に文法の練習問題を解いてもらったり、2ペアからなるグループに分かれて、その場で辞書を使って長文を読解してもらいます。このようなペアワークやグループワークの利点は、同じような環境で学習してきた同世代の仲間の発音がきれいだったり、文法事項をよくわかっていたり、長文がす

らすら読めるのを間近に見て、受講生が多いに刺激を受けることです。「発音・聞き取り・文法・長文読解」のすべてにおいて秀でていたり、またすべてが劣っている学生というのはまずいません。ですから自ら得意な点を活かして、ときには教えてあげたり、教えてもらったりすることで互いの信頼関係を築くことに繋がるのではないかと考えています。

さらにグループワークの延長として、各学期に一度、教科書で扱われた長文の内容についてパワーポイントを用いたプレゼンを行ってもらうことにしています。基本は日本語ですが、プレゼンの最初と最後にはフランス語も話してもらいます。テーマはどれも深く掘り下げられ、思わず唸ってしまうような内容も多く、受講生は授業外に何度もグループで集まり、話し合い、フランス語のサイトを一緒に検索したり、情報をまとめたりしてくれているそうです。普段フランス語には悪戦苦闘しているような学生でも、プレゼンを通して問題意識の高さが窺えたりするので、毎回興味深く発表を聴いています。同時に全受講者に各プレゼンに対してコメントを書いてもらい、それをまとめたものを翌週に講評結果として配布するようになっています。特に通年で受講している学生は、前期と後期でフランス語力も、プレゼン力も、またコメントさえ見違えるように良くなるので、学生の成長を目の当たりにする瞬間でもあります。

受講生のプレゼンを通して改めて感じることは、日仏の関係が私の学生時代とは大きく異なっているということです。かつては「フランスへの片思い」と言われるほど、フランス映画・フランス文学・フランス思想がこぞって日本に輸入され、一方の日本文化は、今ではその最たるものと目される

アニメでさえフランスでは「暴力的・野蛮」と見なされ、テレビの放映が打ち切られるほどでした。ところが今ではヨーロッパ最大の日本関連イベントと称されるジャパン・エキスポを筆頭に、日本が文化発信の担い手となって、フランスの若者から大きな支持を得ています。逆に日本の受講生のフランスに対するイメージと言え、芸術・文化からスイツや原発大国へと変貌し、価値観というのは時代に応じて180度転換することもあるものだと改めて痛感しています。

中級クラスを担当して早2年、この間に新たな問題も見えてきました。その1つが教科書です。「フランス語中級」は週に2回授業がありますが、同一のテキストを使ってネイティブの教員と日本人教員がそれぞれ1度ずつ授業を担当しています。週に2回の授業を別々の教員が担当するとはいえ、これまで受講生に2冊の教科書を購入してもらおうのも躊躇われ、フランスで作成された会話を優先した教科書を選んで使用してきました。しかし会話に比重を置いた教科書は文法項目などの説明も少なく、日本人にとって難しいと感じるポイントが必ずしもテキストに反映されていないといった面もあり、日本人教員はテキストとは別に毎回新たに作成したプリントを用いて、授業を補う形をとってきました。しかしこうなると各クラスによって進度や学習内容に大きな開きができ、上級クラスに進む受講生の足並みがそろわなくなることが少なからず問題となっていました。このような経緯で2012年の授業を担当しながら見えてきた問題点を少しでも改善すべく、日本人教員とネイティブの教員から双方の意見を聞いたなかで編み出されたのが「〈立教生のための〉フランス語教科書」です。2013年度からの使用に向け、授業と並

行しながら1年かけてフランス語研究室で作成しました。中級クラス担当の教員で何度も話し合いを重ね、フランス語研究室で幾度となく加筆訂正を加えて、立教大学のプリンティングステーションで製本された本書は、学生の目標とする留学や仏検取得を念頭に入れ、教室1人1人の立教生を思い浮かべながら作られた、思いの込められた1冊です。実践的な会話、フランスのアクチュアリティを垣間見ることができるといった題材を扱った長文読解、さらに日本人が特に難しいと感じる文法項目に特化した練習問題などを厳選して掲載するように心がけました。文法・練習問題・長文・会話が各課に置かれた、全24課という100頁にもわたる中級フランス語教科書は、他には類をみないのではないかと思います。

2013年度は本書を試用し、実際の授業でどのように使うことができるのか試行錯誤の1年間を過ごしました。実際に使用した受講生に教科書についてのアンケートを実施し、さらに研究室の先生方に幾度となく検討していただき、多くの方々のご協力をいただき、2014年度には市販される運びとなりました。学内の手を離れるため、タイトルについていた〈立教生のための〉という文言は外れることになりましたが、本教科書がかつて同じキャンパスで学んだ後輩のために作られた1冊となっていることを忘れずにいただけましたら嬉しく思います。3月一杯で離職し、長らくお世話になったキャンパスともお別れではございますが、この1冊がお世話になった先生方、立教生へのせめてもの恩返しとなりましたら幸いです。

せき みれい  
(本学教育講師)